

## 電子読書という新しい経験

——「引用」をめぐる考える——

熊沢敏之

本日は、中国、香港、台湾、韓国から、こうしてたくさんの友人の皆さんをこの日本の地にお迎えできて、まことにうれしく思います。そして、国内からも多くの方々においでいただきました。まことにありがとうございました。「東アジア出版人会議」で会長を務めております、筑摩書房の熊沢敏之です。

この「東アジア出版人会議」は、おかげさまをもちまして、今回で第18回を迎えることができました。第1回の会議が2005年9月ですから、すでに10年目の記念すべき年に入っています。

### 【デジタル読書研究会】

本日の公開シンポジウムのテーマは、「電子読書の可能性——東アジア読書共同体を創出できるか」ということになっています。私たち日本のメンバーは、このテーマについてずっと議論と実践を重ねてきました。そして、たんに電子書籍を介して読書するだけでなく、読書しながら思考することの可能性を追求しようと、ある《読書ツール》を用いて人文書を読む会合、すなわち「デジタル読書研究会」というものを立ち上げました。

Web上で展開するそのツールは、《WuWei（無為）》と命名されています。中国の老荘思想の術語のようにも見えますが、名づけの理由は製作者である三分一信之<sup>さんぶいちのぶゆき</sup>さんの胸のなかにあるばかりです。

いま日本でも、電子書籍の流通はかなりの程度本格化してきました。本当の意味での電子書籍「元年」を迎えたのが、ようやく一昨年あるいは昨年のことでした。その市場は昨年で1000億円の大台に乗ったのではないかと<sup>1</sup>と言われ、書籍の総売上7500億円の13%を占めるにいたっています。この1年では、書籍売上の減少分を、電子書籍売上の増加分が多少なりとも補った形になりました。

たとえば、電子書店の最大手であるAmazonのKindleや楽天のKoboのタイトル数は30万点弱（2015年1月）となっていて、競合他社もほとんど同じくらいの電子書籍を取り揃えています。このあと、各地域から電子データベース構築についての報告があると聞いていますが、日本では後ほど発表してもらおう「ジャパンナレッジ」などを例外として、大きなデータベースにはまだまだほとんど手がついていないのが実情です。

しかし、時間とともに少しずつ充実していくことは間違いありません。そこで問題は、

---

<sup>1</sup> 矢野経済研究所調査。2011年度：600億円、2012年度：710億円、2013年度：850億円、2014年度見込み：1050億円。調査機関によって、数字にばらつきがある。

データベースをいかに増やしていくことができるか、ということとともに、電子化によって私たちの読書経験がどのような変容を蒙るのか、あるいは、それがどのように進化／退化するのか、ということなのではないかと思います。

《WuWei（無為）》を使った電子読書の実証実験は、このあと日本の「老若」二人の編集者、加藤敬事<sup>かとうけいじ</sup>さんと海老原勇<sup>えびはらゆう</sup>さん、および韓国人ですが日本の代表となっていたいただいた研究者、趙星銀<sup>チョソンウン</sup>さんの報告によって、目をみはる成果が開陳されるはすです。ですから、詳しいことは後に譲ることにしたいと思います。

### 【夢に向かう実証実験】

いまは、私たちが実際に読んできたテキストが何なのか、ここでご紹介しておくことにいたしましょう。それは、『東アジア人文書 100』にも掲げられている 2 冊、すなわち『丸山眞男講義録』第六冊（東京大学出版会、2000 年）と藤田省三『精神史的考察』（平凡社、1982 年）<sup>2</sup>でした。とりわけ『精神史的考察』は、趙星銀さんによる韓国語訳がすでにトルペゲから出版されていますし、また中国語版も、荘娜さんの訳で四川教育出版社から近々刊行されることになっています。

つまり、東アジアの読書共同体が今後展開していくための、貴重な第一歩を記した本をあえて対象にしてみたわけです。こうした共通の財産が徐々に増えていき、読書ツールを介した多様な実践が各国語で共有化できれば、21 世紀の新しい読書共同体が開けていくかもしれない、と思ったからです。

そんな夢を射程に入れながら、私たちは実際にこの 2 冊を読み進めていきました。そこで私たちが意図したことは、プログラムにあわせて読書するのではなく、読書にあわせてプログラムを改変してもらうことでした。しかし、これはそう簡単なことではなかったのです。というのも、読書をする際、私たちがどのように精神と身体を働かせているかというのは、それほどはっきりと意識化できていたわけではなかったからです。それが分からないと、「読書にあわせて」と要求しようにも、なんら具体性を欠いてしまうからです。

しかし、「幸いなことに」、プログラムはそうスムーズには動いてくれませんでした（新しいソフトウェアを開発することは、それほどまでに大変なことなのですね）。そうこうしているうちに、そのギクシャクの間から、私たちは徐々に自身の読書のありようを反省的に思い描くことができるようになっていきました。

《WuWei（無為）》では、紙の本から「自炊」した（本をページごとにスキャンして PDF ファイルにすることを、日本では「自炊」と言います）個人用の電子書籍を掲げることができるようになっていました。しかし、それは当初、読むための機能しかもたず、「引用する」ための機能がありませんでした。必要な部分を引用したいときには、キーボードを使って一から手入力しなければならなかったのです。こうして、電子情報ならではの copy & paste 機能を、なんとしてもこのツールに付加してもらう必要が生じ

<sup>2</sup>「平凡社ライブラリー」版が 2003 年に刊行された。

ました。

こうして、私たちは「思考すること」と「引用すること」の関係を、少しずつ意識化し、了解していきました。

### 【遠い読書会の思い出から】

《WuWei（無為）》と格闘しているうちに、遠い昔の個人的な思い出がよみがえってきました。それは、1981年から82年にかけて毎月行われていた、ある思想家を中心とした読書会のことでした。この会のことは、2012年12月の台湾会議でも、すこしお話しさせてもらいました（ご記憶の方がいらっしゃるかもしれません）。私がまだ27～28歳のころのことです。そのとき私は筑摩書房で営業部に所属していましたが、一人の書店人に紹介されて、おずおずと見知らぬ人たちばかりの読書会に参加したのでした。そのチューターは、当時のことをこう記しています<sup>3</sup>。

この読書会が求めていたのは、知的情報などではなかった。実際メンバーのなかには編集者、取次社員、書店員、図書館司書がいて、こと本に関する知識や情報について、私などのところへ来る理由は全くないといってよかった。この会が共に手にしようとしたのは、たとえばピエール・クラストルがいう意味での「思考」だったのではないだろうか。「登るよりは下の方が楽であるとしても、思考とはまさに、斜面に逆らって思考することではなかったのか」。

さて、実際、私たちが「斜面に逆らって思考」していたのかどうかは、ほんとうに心もとない限りですが、この読書会が私の人生にとって決定的な意味をもったのもまた確かでした。本の読み方を根本的に教えてもらったのです。

いまここで、その思い出を語ろうとするのは、読書会でのある「ルール」と関わっているからです。それは、誰が言い出したのか、読んだテキストの大切だと思うところを「引用」したレポートをつくり、それをもとに自分の感想や意見を発表するというものでした。ここに掲げた2枚のスライドはその当時のレポートで、すべて引用文で埋め尽くされています。古い蔵書のなかに挟み込まれていたのを、つい先ごろ発見しました。

20世紀初頭に神話学を切り開いたJ・E・ハリスンの『古代の芸術と祭祀』（法政大学出版局）や、同じくエッセー的なスタイルで哲学的・社会学的主題を論じたG・ジンメル『文化の哲学』（白水社）所収の「流行」「<sup>とつて</sup>把手」などでした。30数年前にこの本たちに出会っていたからこそ、その後「ちくま学芸文庫」で「20世紀クラシックス」という古典翻訳シリーズを刊行することができたわけです。不思議な縁としか言いようがありませんが、しかし当時は、それがまさか自分の大切な仕事になろうとは夢にも思いませんでした。

<sup>3</sup> 市村弘正「読書会の時間」、『読むという生き方』平凡社、2003年、所収。

### 【「引用」の本質的機能】

ところで、本を読みながら大事なところに傍線を引いていくというのが、私の読書の日常的な習性となっています。あとで傍線部分を読み返してみるだけで、本の全体像がうまく復元できて便利だからです。読書における「一里塚」、すなわち里程標のような備忘録的機能を果たしてくれるというわけです。

しかし、傍線を引いただけでは、文章はその叙述全体の「文脈」を抜け出すことはできません。プロットの全体像の復元はそれとして有益ですが、「引用」が本来の力、めざましい威力を発揮するのは、いったん文脈から切り離され、忘れ去られ、その後ふたたび記憶のなかから呼び出され、読み返されたときです。意味を生じないモノとなって、長い時間の沈黙に耐えてこそ、引用文は生き生きとよみがえります——それは「秘儀」に等しい行為（すなわち、非行為を核心にもつ行為）でもありましょう。

だから時間が許せば、傍線の部分を書き抜いておくのがベストです。しかし、先のレポートを見てもお分かりのように、これだけでもかなりの手間と労力がかかります。それがいまや、電子情報の copy & paste なら、素早く簡単に引用できるということになりました。大量の引用文のストックが可能になったのです。これはおそらく、電子読書のもっとも大きな可能性の一つとなるはずです。

ある本を読んでいて、驚愕すべき引用文に出会ったとします。出典が示してあれば、その文章が収録されている、もともとの著作を読みたいくなるのが人情です。ところが、その元本があまり面白くない、ということがままあります。じつは、引用されたところだけがすばらしかった、ということですね。これこそが、引用者の実力を証明するばかりでなく、「引用」という行為の本質的な機能を示してくれるものなのです。

こうした引用文の極限の姿を実現するには、その文章にすこしだけ「休眠」してもらう必要がある、というのがいま申し上げたことでした。パソコンのディスクのなか、クラウドのなかほど、それにふさわしい場所はあるでしょうか？

### 【「断片」の運動】

それでは、読書における「引用」という個人的な経験と、私たちの社会史的な経験とは、いったいどのような関係になっているのでしょうか？

『精神史的考察』に収められた傑作、「松陰の精神史的意味に関する一考察」にこうありました。ちなみに、この文章は、幕末の思想家、吉田松陰の著作アンソロジー（日本思想大系『吉田松陰』岩波書店、1978年）を編んだ際の解題（「書目撰定理由」）として書かれたものです。

「状況的」という一句の含み持つ、言ってみれば記号学的な意味についてだけ一言しようと思う。それは、総ての「制度的なもの」、「型」を備えたもの、「恒数的なもの」が崩壊し去った社会状態を示している。社会的行動に当って期待通りの反応を予測させるような「秩序的な関係」が社会の中から消え失せて、「変数」相互の測るべから

ざる衝突や結合が社会の主たる動向となって来るのが「状況的」社会状態なのである。

藤田省三は、幕末の社会を「状況的」というタームを使って、一気に現前させました。短い叙述のなかに、混沌とした時代の社会状況がみごとに構造化されています。そして、社会ばかりでなく、思想もすべて「筋道立った秩序性（理論的首尾一貫性と言ってもよい）を完全に喪って最終的に断片的スクラップと化し終った」（傍点引用者）と付け加えます。ここで「断片」は、社会と思想が崩壊していく際の厳しい表徴となっています。

しかし、そこには決定的な反転が用意されていました。「断片」の運動がもたらす新しい社会の到来です。

そのすさまじい状況化の極致を経ることを通して、その中からそうした状況を克服すべく、「奇兵隊」に象徴され又「連合」計画に象徴されるような横断的な結社が全く新しく生れて来て、それこそが新しい社会構成の核心となるのであった。

振り返って、いまの日本がこうした「状況的」と形容される社会なのかといえ、その兆候すらないことは明白です。同じ本のなかに、こんなことも書かれていました<sup>4</sup>。

過剰な技術化を通して人間の理性がことごとく製品と装置と官僚機構と事務所に吸収されて「物化」したため、かえって理性はそれ固有の自由な働きを失って「理性なき合理化」へと幽閉されてしまった……。

藤田はこれを、「二十世紀的現実」と名づけました（さて、中国、香港、台湾、韓国でも、同じようなことが起こっているのかどうか、気になるところです）。

こうして、「状況化」の極致、すなわち、すべてが「断片」と化して崩壊するなかから、断片相互の運動による社会的生成の始まりが画される、と藤田は考えたのでしょう。そこにこそ、あえて局限的な事象を取り上げながら普遍的な真理にいたろうとする、「精神史的考察」の核心がありました。

社会が崩壊でもしない限り、「断片的スクラップ」が現れることもありません。「二十世紀的現実」が永遠に回帰するばかりです。しかし、私たちは日々「断片」を生み出し続ける、きわめて簡便な経験を知っています。それは何かと云えば、書物を読み「引用」という、精神と身体共同作業でした。ここで、ひとつの比喩をお許してください。実際に「相撲」をとる日がいつ来るか知れないにしても、私たちは日々、基礎トレーニングである「四股」を踏み続ける必要があるのです。経験の胎盤を作り出す、日常的な訓練として。

<sup>4</sup> 藤田省三「或る喪失の経験」、『精神史的考察』所収。

### 【電子読書の未来を見据えて】

電子読書の可能性は、私たちが具体的な取り組みを積み重ねるごとに、限りなく広がっていくはずです。「東アジア読書共同体」も、きっと夢でなくなるかもしれません。電子読書における「引用」の有効性とその社会史的意味については、すこし原理的なお話をさせていただきました。

そこで、最後に「いましめ」のようなことを付け加えて、話を終わりたいと思います。電子情報の copy & paste についてです。こうした「手の仕事」の省略は、うまく付き合っていないとすこし危険だからです。

くたくたく述べることはせずに、一人の詩人の文章を引きます。その人は、石原吉郎<sup>いしはらよしろう</sup>。1945年の終戦直後にハルビンでソ連軍に抑留され、スパイ容疑でラーゲリ（強制収容所）に送られました。1953年に帰国するまでの8年間、「肉体が精神を侮蔑し、ひたすらこれを遠ざかって行く過程の、不毛な積み重ね」<sup>5</sup>を生きた記録が、『望郷と海』（筑摩書房、1972年）という戦慄すべき評論集となりました。その「あとがき」に代わるものとして、次の文章が新聞紙上に掲載されました<sup>6</sup>。

生きて帰って来たという事実そのものが、のがれがたく墮落であるという地点まで一度は自分を追いつめなければならないのではないか。私に出発という行為があるとすれば、かろうじてそののちである。

「生きていてよかった」というような言葉は、私には嘲弄以外のなにものでもない。すなわちもっともよき人びとは帰っては来なかった。

フランクフル「夜と霧」

はたして「出発という行為」は果たされたのでしょうか？ 4年後の1977年、自宅の浴槽で亡くなっているのが発見されます。享年62歳。

私は、石原の文章を copy & paste することがどうしてもできません。キーボードで打ち込むことも、すこし気が引けます。それは、一文字一文字、「手の仕事」によって書きつけられることを望んでいます。

東アジア世界には、長い歴史をもったすばらしい文化がありました。「写経」です。祈りとともに刻まれる極致の文章もあることを心にとどめながら、しかし、新しい共同の未来に向かって希望を託していくことにいたしましょう。

---

<sup>5</sup> 石原吉郎『『望郷と海』について』読売新聞、1973年10月13日。

<sup>6</sup> 同上。

**熊沢敏之**（くまざわ・としゆき）

1953 年生まれ。1977 年、東京大学文学部西洋史学科卒業。同年、筑摩書房入社。1993 年「ちくま学芸文庫」編集長。2000 年まで、一連の硬派な企画群、とりわけ 20 世紀の古典の翻訳書（アレント『人間の条件』、『ベンヤミン・コレクション』など）を刊行して、新しい読者を創出する。2004 年、取締役編集局長。08 年、代表取締役専務・編集局長。11 年、代表取締役社長、現在に至る。2015 年から、東アジア出版人会議会長。